

桜井城跡発掘調査 現地説明会

平成 29 年 3 月 11 日（土）
安城市教育委員会文化振興課

安城市教育委員会文化振興課は、昨年度から桜井地区の区画整理に伴う桜井城跡の調査を継続してきました。今まで、桜井城と同時期に掘られた大型の井戸や溝、さらに桜井城よりも遡る時代の堅穴建物跡や掘立柱建物跡など、複数の時期にわたる数多くの遺構や遺物が検出されました。

今回、今年度最後の調査区の調査にあたり、今年度の成果をあわせて紹介したいと思います。

■桜井城とは

桜井城は、安城松平 4 代 親忠の子 親房が桜井へ分家したことにはじまります。桜井神社に残る棟札から、親房は大永 7 年（1527）に桜井神明社を建立していることがわかります。

親房の死後、安城松平 5 代 長忠の子 信定が入り、桜井松平初代となりました。その後、天正 18 年（1590）、桜井松平 6 代 家広が家康の関東移封に伴ってこの地を離れたことにより、桜井城は廃城となったとされます。城としての存続期間は、60～70 年程度でした。桜井松平家は転封を重ねながら幕末まで続き、明治維新時は尼崎藩 4 万 5 千石の大名でした。

広島市立中央図書館浅野文庫所蔵の『諸国古城之図』（江戸時代の 1683 年ころ成立）には、「桜井」として取り上げられ、今回の発掘調査区周辺は「昔ハ士ヤシキ」だったと記されています。

■調査の概要

今年度は、新たに敷設される道路部分の調査を行ってきました。

南区とした場所では数多くの柱穴や溝、堅穴建物跡が確認されています。掘立柱建物は東西 4 間、南北 3 間の 1 棟が確認できます。時代は出土遺物が少ないため不明です。その東では堅穴建物跡が検出されています。建物跡の北東隅からはその東の斜面に向かって溝が設けられていました。出土した須恵器から奈良時代に建てられたものとみられます。

南 1 区以外の調査区では、幅 4～5m、深さ 1.4～2.0m の大型の溝が検出されています。調査では全長約 70m を確認しています。溝の西端（西 4 区、現在地）でほぼ直角に南へ折れ曲がり、そのまま南へ延びるようです。出土している遺物から、桜井城とほぼ同時期に掘られ、その後、桜井城の廃城後、あまり時間を経ずに埋められたようです。溝を埋めるにあたり、溝の周囲に拡がっていた古代の土を削って利用したため、溝からは須恵器も数多く出土しました。

溝の性格について、底には粘土や砂が堆積していたことから、水が張っていたようです。溝の側面は急角度で中から登るのが困難であり、防御目的とみられます。西端で南へ折れて延びていることが確認できました。

また、溝は掘りなおして再利用されていました。掘りなおされた部分からは、近世よりも新しい陶磁器の破片や瓦片が多量に出土しています。この新しい溝は西の端で南北両方向に延びることを確認しました。

■まとめ

昨年度まで、桜井城の周辺については発掘調査が行われておらず、江戸時代の絵図から想定するほかありませんでした。今までの調査で、城の近くに大型の井戸やいくつもの土坑が並んで掘られた生産に関連するとみられる場所が見つかっています。今回の溝の確認で、桜井城と同じ時代の遺構がさらに西と南に拡がることが確認できました。

また、桜井城が築かれる以前の古代の遺跡も、溝によってだいぶ破壊されているとみられるものの、今までの調査地のほぼすべてで拡がっていることが分かりました。



↑調査区周辺と桜井城跡縄張り復元図（天野暢保 1991「桜井城」『定本西三河の城』を参考に作成）



↑発掘調査の様子（夏季）
桜井城跡は、昨年度から長期にわたり発掘調査がつづいています。重機で表土を剥ぎとった後は、ひたすら手作業です。深さ 1m 以上ある溝も、すべて発掘作業員さんたちの手で掘られました。

←天和 3 年（1683）頃に成立したとされる「諸国古城之図」に描かれた桜井城跡の城絵図（トレース、一部省略）
※絵図に記された方角は、実際の方角よりもずれています。

28年度調査区平面図

